

# 首里杜地区

## 整備基本計画



2022(令和4)年4月 沖縄県

## 目次

---

### 第1章 計画策定の背景

---

<b>1. 計画策定の背景</b> .....	<b>1 章-1</b>
(1)「新・首里杜構想」の策定 .....	1 章-1
(2)「首里杜地区整備基本計画」の目的・意義・計画期間.....	1 章-5
(3)計画対象範囲(首里杜地区) .....	1 章-5
(4)策定の経緯.....	1 章-6
<b>2. 首里杜地区整備基本計画の前提</b> .....	<b>1 章-8</b>
(1)計画の位置付け.....	1 章-8
(2)計画に関連する地域の意向.....	1 章-9

---

### 第2章 首里杜地区の特徴及びまちづくりの目指す姿

---

<b>1. 首里杜地区の特徴及びまちづくりの目指す姿</b> .....	<b>2 章-1</b>
(1)首里杜地区の特徴.....	2 章-1
(2)首里杜地区のまちづくりで目指す姿.....	2 章-21
<b>2. 首里杜地区におけるまちづくりの課題</b> .....	<b>2 章-23</b>
<b>3. まちづくりの基本方針及び施策体系</b> .....	<b>2 章-27</b>
(1)古都首里を感じられる空間の創出.....	2 章-27
(2)歴史文化資源等の保全・整備・活用.....	2 章-29
(3)暮らしと観光が両立した住みやすく魅力的なまちづくり .....	2 章-31
【付図①】まちづくりの将来イメージ.....	2 章-35

---

### 第3章 整備基本計画(10年計画)

---

<b>1. 計画期間における到達目標</b> .....	<b>3 章-1</b>
(1)「古都首里を感じられる空間の創出」に向けた到達目標.....	3 章-1
(2)「歴史文化資源の保全・整備・活用」に向けた到達目標.....	3 章-2
(3)「暮らしと観光が両立した住みやすく魅力的なまちづくり」に向けた到達目標 .....	3 章-2
<b>2. 取り組み抽出及び優先順位化の考え方</b> .....	<b>3 章-4</b>
<b>3. 抽出した取り組み一覧</b> .....	<b>3 章-5</b>
<b>4. 取り組みのロードマップ</b> .....	<b>3 章-6</b>
<b>5. テーマ(エリア)別実施プログラム</b> .....	<b>3 章-11</b>
(1)テーマ(視点)及びエリア別パッケージの考え方 .....	3 章-11
(2)テーマ(エリア)別実施プログラム.....	3 章-12
【付図②】整備基本計画図.....	3 章-15

---

## 第4章 計画の実現に向けて

---

<b>1. 推進体制</b> .....	<b>4 章-1</b>
(1)役割 .....	4 章-1
(2)構成 .....	4 章-1
<b>2. 事業進捗の評価・計画改定</b> .....	<b>4 章-3</b>
(1)評価と計画改定 .....	4 章-3
(2)評価の方法 .....	4 章-3



# 第1章 計画策定の背景

## 1. 計画策定の背景

### (1) 「新・首里杜構想」の策定

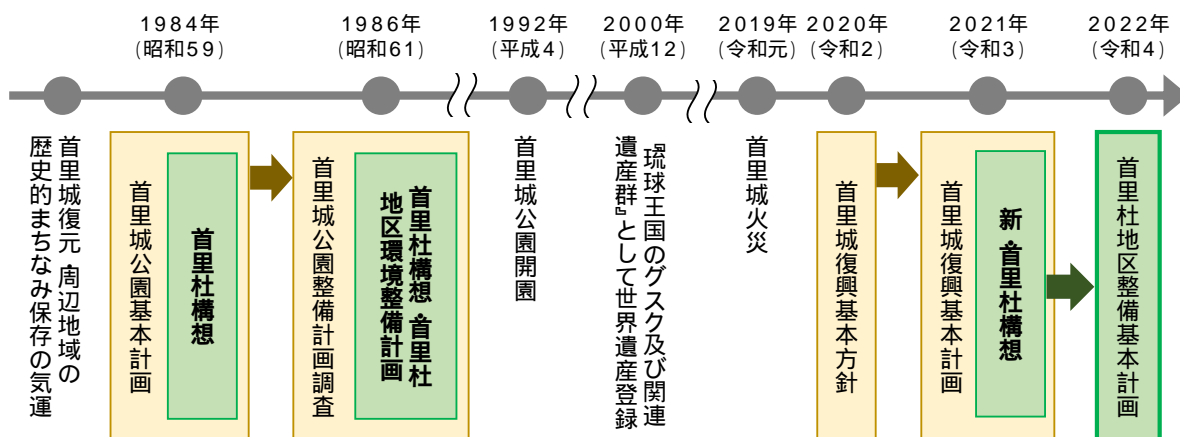
首里杜地区整備基本計画（以下、本計画とする）は、『首里城復興基本計画』（2021（令和3）年3月）において位置付けられた「新・首里杜構想」に基づく計画となる。これは、「新」の名が示すとおり「首里杜構想」を見直したものである。

「首里杜構想」とは、1984（昭和59）年に沖縄県が策定した『首里城公園基本計画』において示された、首里城公園整備の基本理念となる構想である。構想では、首里城公園を核にこれを取り巻く城下町（首里杜地区）そして首里のまちを成立せしめた自然地理的空間（歴史的風土保全地区）という3重構造を設定した。首里城復元の基本姿勢として、首里城が単体ではなく、周囲のまちや環境と一体的な存在であるとの概念を示したものであり、ここで描かれた首里の歴史的まちづくりの方向性は、その後のまちづくりにも大きな影響を与え、様々な場面で理念として引き継がれてきた。

このような中、2019（令和元）年10月31日に首里城火災が発生した。沖縄県では、首里城の再建にとどまらず、首里城に象徴される琉球の歴史・文化の復興に向けた取り組みを進めるとして、2020（令和2）年4月に『首里城復興基本方針』を策定した。方針のなかで、首里杜地区は首里城跡を保護するバッファゾーンであり、「首里杜構想」を社会環境の変化や時代のニーズを踏まえて見直しすることが示され、翌2021（令和3）年3月に策定された『首里城復興基本計画』において「新・首里杜構想」が位置付けられた。

「新・首里杜構想」では、首里城公園及び首里杜地区を改めて一体的なものとして捉え、歴史・文化的遺産の復元整備や歴史的風土環境の保全を行い、後世に残していくという理念に基づき、5つの方針を定めている。（1章-4頁参照）

### 「首里杜構想」から「新・首里杜構想」及び本計画の策定まで



緑枠が首里杜構想及び関連計画

## 首里杜構想の概要

「首里杜構想」は、1984（昭和59）年の『首里城公園基本計画』に掲載されたものが最初であり、ここでは構想の概念と構想図が示された。

1986（昭和61）年の『首里城公園整備計画調査』で、改めて「首里杜構想」の範囲や方針が明確化された。また「首里杜地区環境整備計画」の章を設け、まちづくりに関する具体策を示している。

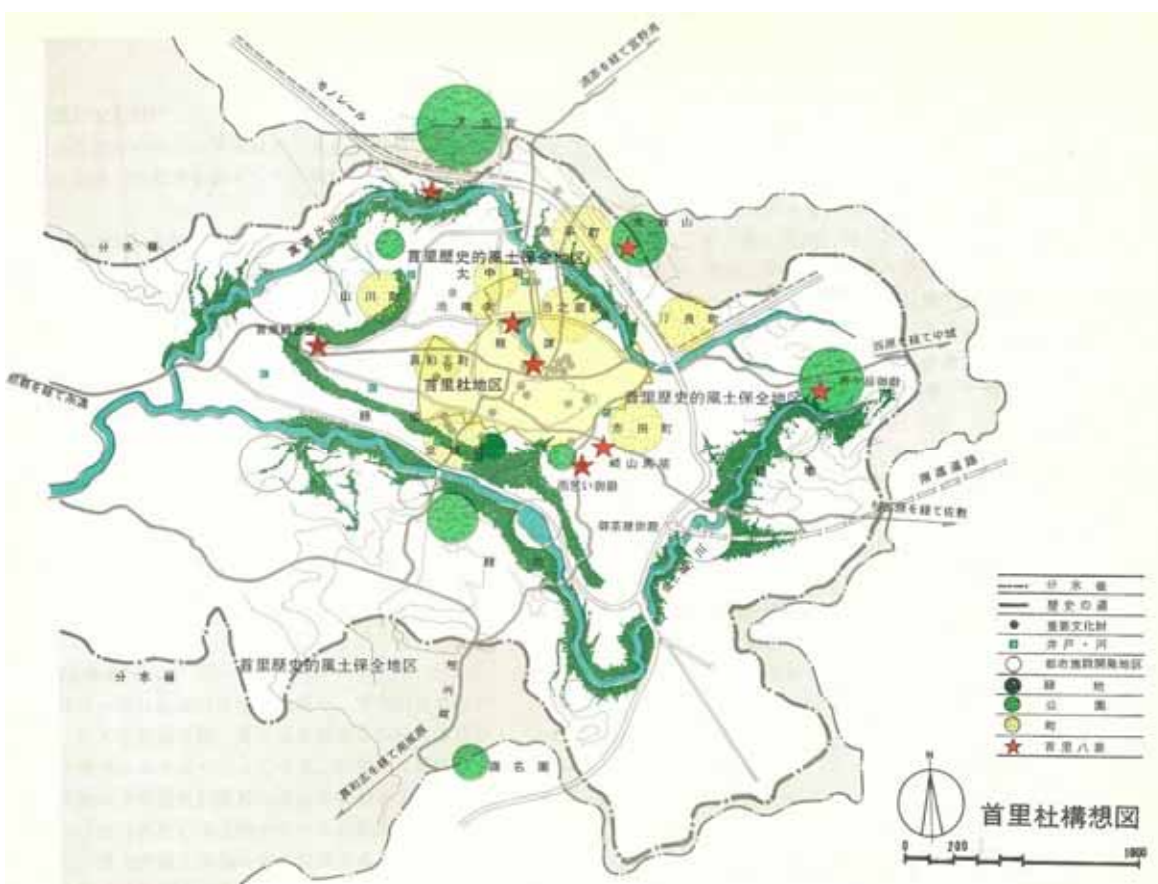
### 「首里杜」構想

首里城を頂点にした首里の町は、かれることのない豊かな水と極めて深い関係の中に立地してきた。首里城正殿の東の井戸、瑞泉門の横の龍樋、集落の中に点在する数多くの共同井戸、円鑑池や龍潭の水、三箇の泡盛製造等、豊富な水に恵まれた歴史である。これらの水は集まって川をつくり、真嘉比川と金城川に流れ込み、この水系に囲まれた中に首里の歴史的な都が発展してきた。

水系の分水嶺とその一体の、緑に包まれた傾斜地に首里を代表する景勝地が点在し、首里を大きく包囲する構造的な風土環境を形成している。

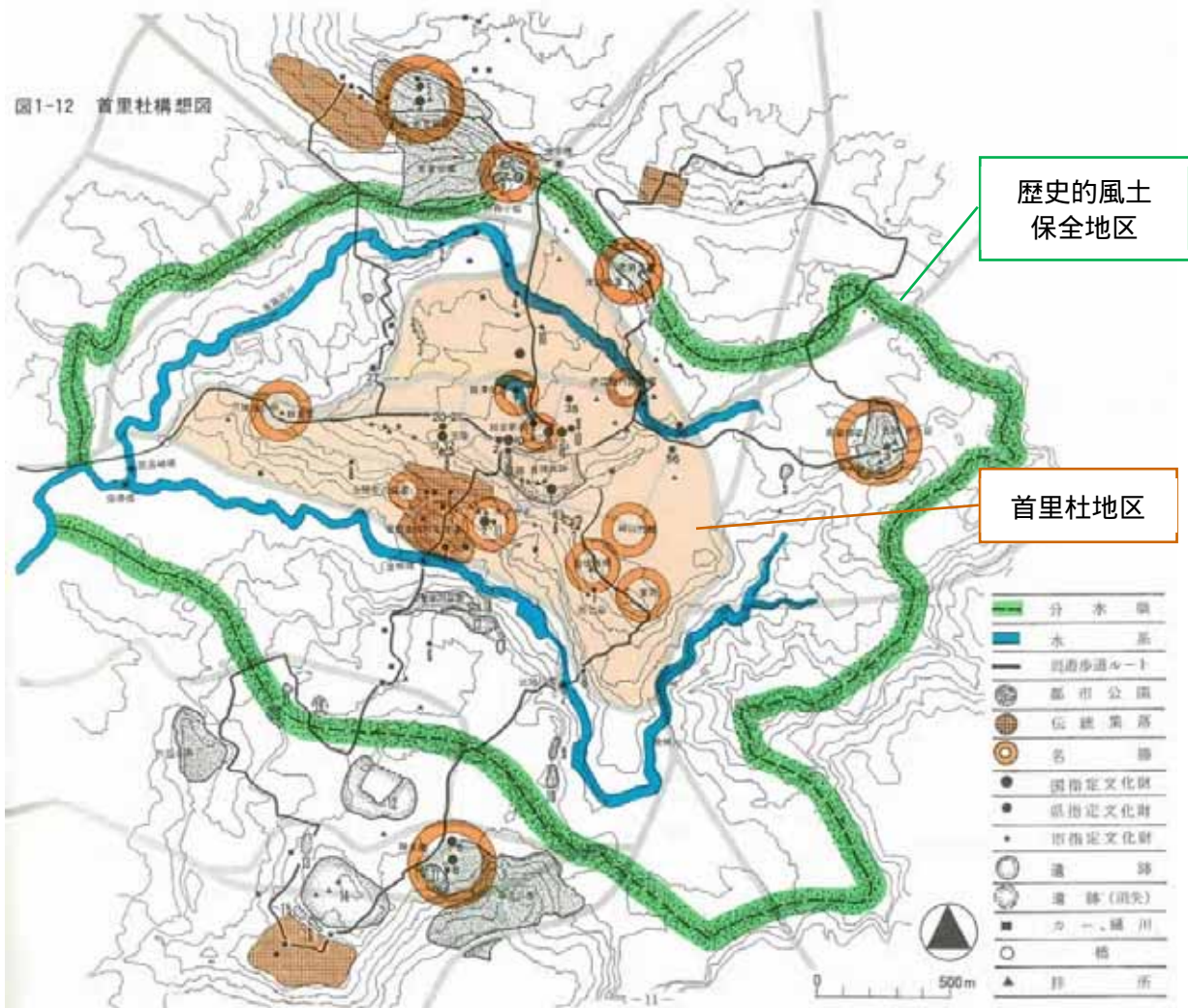
「首里杜構想」は弁ヶ嶽御嶽を頂点に、真嘉比川と金城川の両水系に囲まれた範囲、及び流域と分水嶺一帯を、古都首里の歴史的發展を特徴づけた風土環境としてとらえた。首里の歴史的環境を支える地形の状況は、今も昔も基本的に変化はなく、長い歴史を越えて受け継がれてきた。そこで首里杜構想では、首里城を中核とする一帯を首里杜地区、これをとりまき2本の水系が骨格となった首里のまち一帯を首里歴史的風土保全地区として、今後の首里のまちづくりに一つの方向性を示すと同時に、首里城公園の位置づけを明らかにするものである。

### 首里杜構想図



出典：『首里城公園基本計画』（沖縄県、1984年）

『首里城公園整備計画調査』(1986年)における首里杜構想図と方針



首里杜構想の<方針>

- ①地形、地質、水質、植生等を基盤にして形成された首里の歴史的環境の範囲を把握（とらえ）、点在する文化財と自然環境—歴史的風土を一体として保全する。
- ②歴史的環境の中で進行する各種の都市開発事業は、首里の歴史的な町なみや風土と調和することを原則とし、可能な限り地形、水系、植生、景観を保全・回復する。
- ③歴史的都市の骨格を形成する首里城をとりまく枢要な拠点は、重点的に保全整備し、特に首里城からの眺望を確保する。
- ④点在する文化財やこれをとりまく歴史的風土を巡る周遊歩道を整備し、歴史的要素の連続化を図る。
- ⑤首里城公園の整備に関連して、首里城と密接な関係を持つ地区については、集約的な歴史的、文化的なまちづくりを推進する。

出典：『首里城公園整備計画調査』(沖縄県、1986年6月)

## 新・首里杜構想

---

### 策定の意義

首里杜構想は、地形や水系など古都首里の歴史的発展を特徴づけた風土環境を基盤に、首里城を中核とする文化資源、それをとりまく首里杜地区として位置づけられた首里のまちづくりの方向性を示したものであり、これに基づき 35 年以上にわたり取組が実施されてきた。

このような中、令和元年 10 月 31 日未明に発生した火災により、首里杜構想の中核である首里城正殿等が焼失した。一方で、この焼失は、首里城から派生し、それぞれに受け継がれている私たち沖縄の文化を改めて意識する契機ともなった。

この機を捉え、首里杜構想で残された課題及び社会状況やニーズの変化に対応するため、新・首里杜構想を策定し、新たに 50 年、100 年後に伝承していく歴史、文化的な首里杜地区の形成に取り組んでいく。

### 理念

首里城正殿をはじめとする首里城公園全体及び城下町として発展した首里杜地区を改めて一体的なものとしてとらえ、歴史、文化的遺産の復元整備とともに歴史的風土環境の保全など、県民が首里杜地区を沖縄の歴史、文化を体現する空間として共有し、これを後世に残していく。

### 方針

1. 中核をなす首里城及び外苑の一群の文化資源を保存・整備するとともに、文化を育む拠点の充実を図る。
2. 古都首里の歴史的なたたずまいに配慮した景観形成とともに、住みやすく魅力的なまちづくりを進める。
3. 総合的な交通対策により、暮らしと観光が両立した歩行者中心のまちづくりを進める。
4. 地形、地質、水系、植生等を基盤に形成された歴史的風土の環境を保全する。
5. 行政機関及び地域住民、教育機関、関係団体等が連携して推進体制を構築し、整備基本計画の策定、実施に取り組む。

出典：「首里城復興基本計画」（沖縄県、2021 年 3 月 29 日）



## (2) 「首里杜地区整備基本計画」の目的・意義・計画期間

### 目的

本計画は、「首里城復興基本計画」の基本施策に位置付けられた「新・首里杜構想による歴史まちづくりの推進」を目的として、首里杜地区に関連する国、県、那覇市の分野別計画と整合を図りつつ、歴史まちづくりの目指す姿や具体的な施策などをとりまとめて整備基本計画とし、計画期間における各取り組みの具体的なロードマップを整理するものである。

### 意義

望ましい歴史まちづくりをこれまで以上に推進し、地域課題を解決しつつ「新・首里杜構想」を着実に実現するためには、都市計画、交通、文化、観光、商業、地域などの関係主体が、目標像を共有し、連携して取り組む必要がある。本計画の意義は、各施策を横断的・一体的にとりまとめることで効率的かつ効果的な事業の推進を図るところにある。

### 計画期間

- 本計画の計画期間は、2022（令和4）年度から2031（令和13）年度までの10年間とする。
- 正殿の完成予定である2026（令和8）年度までを前期5年、それ以降を後期5年とする。
- 本計画は進捗管理と事業効果の検証を踏まえ、10年ごとに更新する。

## (3) 計画対象範囲(首里杜地区)

新・首里杜構想で位置付けられた「首里杜地区」(約164ha)を基本的な対象とするが、テーマや施策により必要に応じて周辺の自然資源、歴史文化資源、都市施設等も対象に含むものとする。



#### (4) 策定の経緯

##### 策定体制

本計画の策定にあたっては、「首里杜地区整備基本計画検討委員会」を設置した。専門的な内容については、委員会の下に設置した「景観部会」及び「交通部会」で議論した。

##### 検討委員会名簿

立場	専門等	所属	氏名
委員長	都市計画	琉球大学 名誉教授	池田 孝之
委員	交通	琉球大学 工学部社会基盤デザインコース 准教授	神谷 大介
委員	観光	琉球大学 国際地域創造学部 教授	越智 正樹
委員	歴史	沖縄県立博物館・美術館 館長	田名 真之
委員	歴史	沖縄県立芸術大学 准教授	麻生 伸一
委員	地域	NPO 法人首里まちづくり研究会副理事長	いのうえ ちず

立場	専門等	所属	氏名
協力委員	国	沖縄総合事務局 開発建設部公園・まちづくり調整官	望月 一彦
協力委員	沖縄県	沖縄県 土木建築部 参事	高嶺 賢巳
協力委員	沖縄県	沖縄県 土木建築部 南部土木事務所長	金城 利幸
協力委員	沖縄県	沖縄県 教育庁 文化財課長	諸見 友重
協力委員	沖縄県	沖縄県 文化観光スポーツ部 観光振興課長	又吉 信
協力委員	那覇市	那覇市 都市みらい部 部長	幸地 貴
協力委員	那覇市	那覇市 市民文化部 文化財課長	大城 敦子
協力委員	那覇市	那覇市 経済観光部 観光課長	池村 博之
協力委員	指定管理者	(一財)沖縄美ら島財団 事務局長	西銘 宜孝

##### 景観部会名簿

立場	氏名	職名等
委員	池田 孝之	琉球大学 名誉教授
委員	越智 正樹	琉球大学 国際地域創造学部 教授
委員	麻生 伸一	沖縄県立芸術大学 准教授
委員	いのうえ ちず	NPO 法人首里まちづくり研究会副理事長

区分	関係課
国	内閣府 沖縄総合事務局 開発建設部公園・まちづくり調整官
沖縄県	土木建築部参事、都市公園課、都市計画モジュール課、南部土木事務所、文化財課、観光振興課、観光政策課
那覇市	都市計画課、道路建設課、花とみどり課、文化財課、観光課
指定管理者	(一財)沖縄美ら島財団

## 交通部会名簿

立場	氏名	職名等
委員	神谷 大介	琉球大学 工学部社会基盤デザインコース 准教授
委員	いのうえ ちず	NPO 法人首里まちづくり研究会副理事長

区分	関係課
国	内閣府 沖縄総合事務局 開発建設部 公園・まちづくり調整官
沖縄県	土木建築部参事、都市公園課、道路街路課、道路管理課、南部土木事務所、交通政策課、観光政策課、観光振興課
那覇市	都市計画課、道路建設課、観光課
指定管理者	(一財)沖縄美ら島財団

## 策定経緯

委員会及び部会は次の日程で実施した。

## 策定経緯

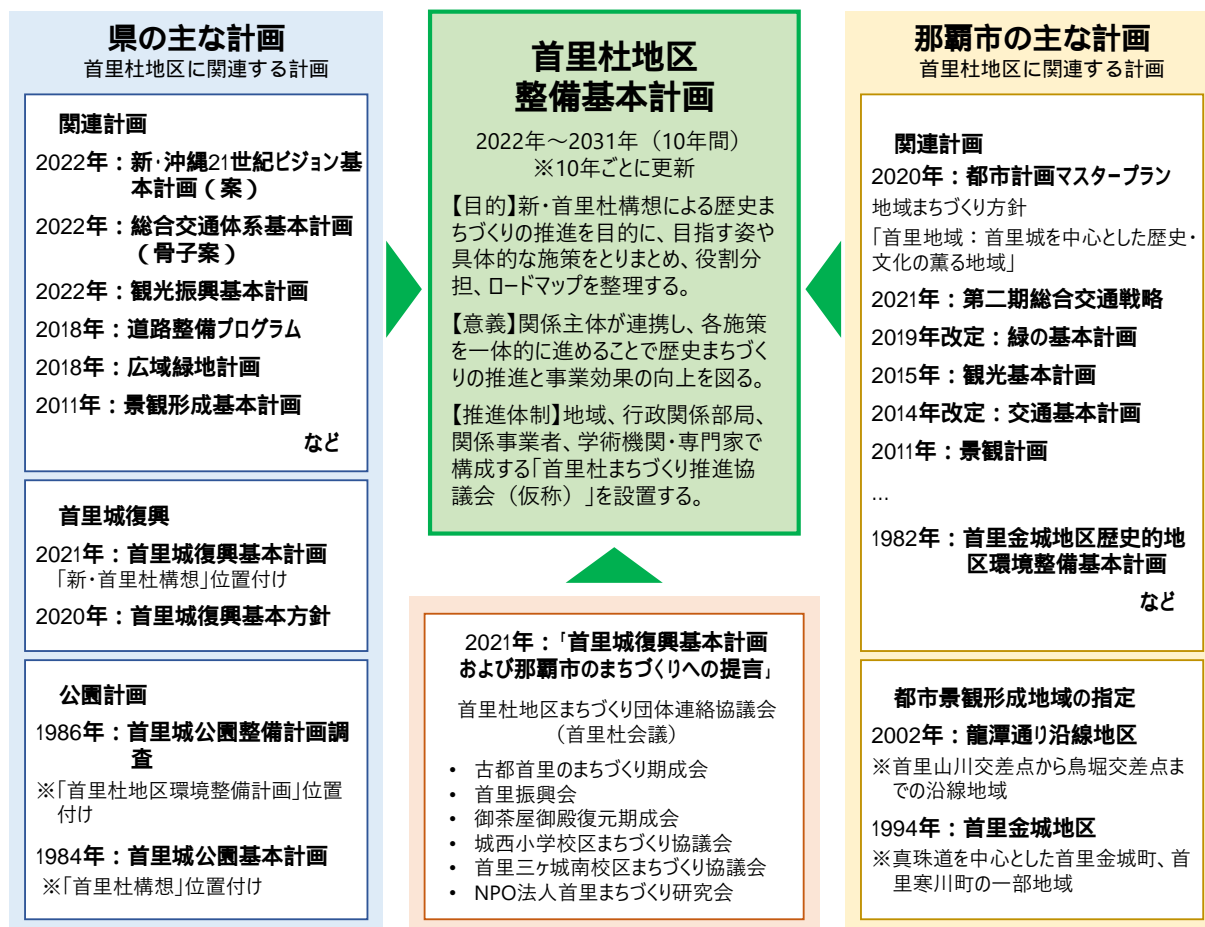
回	日付	検討内容	
第1回検討委員会	2021(令和3)年 7月16日(金)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 景観・文化分野の方針及び方向性について</li> <li>・ 交通分野の今年度作業方針・現況整理</li> <li>・ アンケート調査について</li> </ul>	
部会	景観部会	2021(令和3)年 9月13日(月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 景観部会の検討範囲・進め方</li> <li>・ 首里杜地区の特徴(「首里らしさ」とは)</li> <li>・ 拠点となる地域資源の検討</li> </ul>
	交通部会	2021(令和3)年 9月28日(火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 交通部会の作業範囲</li> <li>・ 首里杜地区を取り巻く交通の現状・課題</li> <li>・ 首里杜地区の交通環境改善に向けた取り組み(案)</li> </ul>
	景観部会	2021(令和3)年 12月8日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ アンケート調査結果等の概要</li> <li>・ 首里杜地区整備基本計画(骨子案)の検討</li> </ul>
	交通部会	2021(令和3)年 12月9日(木)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ アンケート調査結果等の概要</li> <li>・ 首里杜地区整備基本計画(骨子案)の検討</li> </ul>
第2回検討委員会	2022(令和4)年 2月3日(木)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 首里杜地区整備基本計画(素案)の検討</li> <li>・ 推進体制の検討</li> </ul>	
第3回検討委員会	2022(令和4)年 3月10日(木)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 首里杜地区整備基本計画(案)の検討</li> <li>・ 次年度以降の取り組みについての検討</li> </ul>	

## 2. 首里杜地区整備基本計画の前提

### (1) 計画の位置付け

本計画は、新・首里杜構想を実現する具体策としてまちづくりの目指す姿や施策をとりまとめるものであるが、首里のまちづくりに関することから、那覇市都市計画マスタープランをはじめとする市の地域計画をベースとする。これに関連する国・県の計画や、地域団体からの提言などの地域意向を踏まえ、さらに目指す姿の実現のために必要な新たな施策を追加し、体系化するものである。

#### 本計画の位置付け



## (2) 計画に関連する地域の意向

首里杜地区のまちづくりには、地域の関わりが重要である。首里杜地区には各自治会をはじめ多くの地域団体があり、それぞれ活発に活動しているところであるが、特にまちづくりに関しては2020(令和2)年に「首里杜地区まちづくり団体連絡協議会」(1)として地域団体の横断的組織が結成されている。

同協議会は2021(令和3)年2月、『首里城復興基本計画および那覇市のまちづくりへの提言「50年後、どんな首里のまちにしたいですか?」』(以下、「提言書」)を発表した。また、2021年10月には「首里杜地区・首里歴史エリアまちづくりMAP」を公開した。

今回、首里杜地区整備基本計画を策定するにあたり、この提言書やMAP、地域住民や団体へのアンケート調査(2)や意見交換会(3)を通して地域意向を確認した。主な地域の意向は次のとおりである。

### 1: [首里杜地区まちづくり団体連絡協議会]

古都首里のまちづくり期成会、首里振興会、御茶屋御殿復元期成会、城西小学校区まちづくり協議会、首里三ヶ城南校区まちづくり協議会、NPO法人 首里まちづくり研究会 の6団体からなる。

### 2: [アンケート調査]

住民アンケート及び学校保護者アンケートを2021(令和3)年9月から10月にかけて実施した。

アンケート種類	対象・方法	有効回答数
住民アンケート	地区内住戸に2000部を配布し、郵送またはwebで回答	668件
学校保護者アンケート	城西小、城南こども園、城南小、首里中の保護者に対し、学校のメーリングリスト等を通じてwebにて配布・回答	366件

### 3: [意見交換会]

地域意見交換会は、首里杜地区まちづくり団体連絡協議会の構成団体に呼びかけ、2021(令和3)年10月13日及び2022(令和4)年2月25日に実施した。

### 歴史まちづくりについて

アンケートでは、残していきたい・首里らしいと感じる場として、石畳や首里城、龍潭などの文化財や、崎山馬場通り・龍潭通りなどの道すじに多くの回答が集まった。挙げられた資源の大半はこれまでに行われてきた歴史文化資源の整備箇所とも重なっている。その他、御茶屋御殿、玉那覇味噌醤油店、酒造所や染織り工房などの地域資源がみられる。また、首里らしさや文化資源を後世に受け継ぐために必要な対策としては、保護制度の充実、景観整備への支援と景観規制、文化資源の周知などが上位に挙げられた。なお景観保全ルールの是非については、あるほうがよいと答えた人が9割近くに達するなど地域の景観に対する意識の高さが確認できた。

提言書では、公共施設の整備は本物志向で行うこと、眺望を重視したまちなみ整備、スーヅグワの整備、首里の歴史的環境を踏まえた水と緑のうるおいある環境整備を求めるとともに、「歴史文化資源を点ではなく面として周遊できること」「歴史と伝統文化を体感できる整備で、住民と訪問者双方が満足するまち」を標題に掲げている。

意見交換会では、これ以外に中城御殿や円覚寺、御茶屋御殿などの復元整備に向けた取り組みへの要望、伝統芸能や地域資源の継承に祭りが果たしてきた意義などについて意見があった。

## 交通環境について

今回のアンケートで交通量に対する感覚を調査したところ、入域観光客数ピーク期である2019（令和元）年頃と、新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が明け県民及び観光客等の社会活動が一部再開している2020（令和2）年7月以降を比較すると、首里杜地区全体で「多すぎて非常に迷惑」と感じていた人が38.6%から4.2%と減少していることが確認でき、特に池端交差点付近を抽出して比較すると64.0%から0%と大幅に減少しており、首里城公園へアクセスする道路の交通量低下の影響が大きいことが確認された。

また、今後のまちづくりを考える上での交通の問題を調査すると、「朝夕の交通渋滞」が突出して多く、ついで「歩行空間がない・狭い」「観光に起因する交通渋滞」「生活道路への車両侵入」「道が狭い」が上位に挙がり、様々な要因による交通の問題が生じていることが確認できた。

提言書では、「渋滞のない、住民にも観光客にもやさしく、歩きやすいまち」を標題に掲げ、歩行者優先の歩いて楽しいまちづくりや福祉の観点も踏まえた新たな交通手段を提案している。

新たな交通手段について、路線型、デマンド型、個人型のいずれが望ましいかアンケートで意向調査したところ、路線型の希望が突出していた。また自家用車所有者が87.5%と高率であるにもかかわらず、新たな交通サービスを利用したいと答えた人は69.4%にのぼり、自家用車以外の交通手段への期待は高いといえる。

## 今後のまちづくりに関する提案

提言書では、ICT技術の活用や平和の希求（近現代史も含めた学習環境づくり）、次世代を担う子どもたちが誇りに思える場の創出といったテーマが挙げられている。地域意見交換会でも、子どもたちへの歴史文化の継承は度々話題に上った。

また、提言書では行政と市民が協働してつくりあげる首里のまちをテーマに、まちづくり協議会の設置や活動を提案している。

地域からの提言書やアンケート調査、地域意見交換会にて把握した地域意向については、2章の「首里杜地区におけるまちづくりの課題」や「まちづくりの基本方針及び施策体系」、3章の「抽出した取り組み一覧」、4章の「推進体制」など計画全体に反映することで、地域との連携強化や、地域主体（地域が主役）のまちづくりの推進を図る。

## 第2章 首里杜地区の特徴及びまちづくりの目指す姿

### 1. 首里杜地区の特徴及びまちづくりの目指す姿

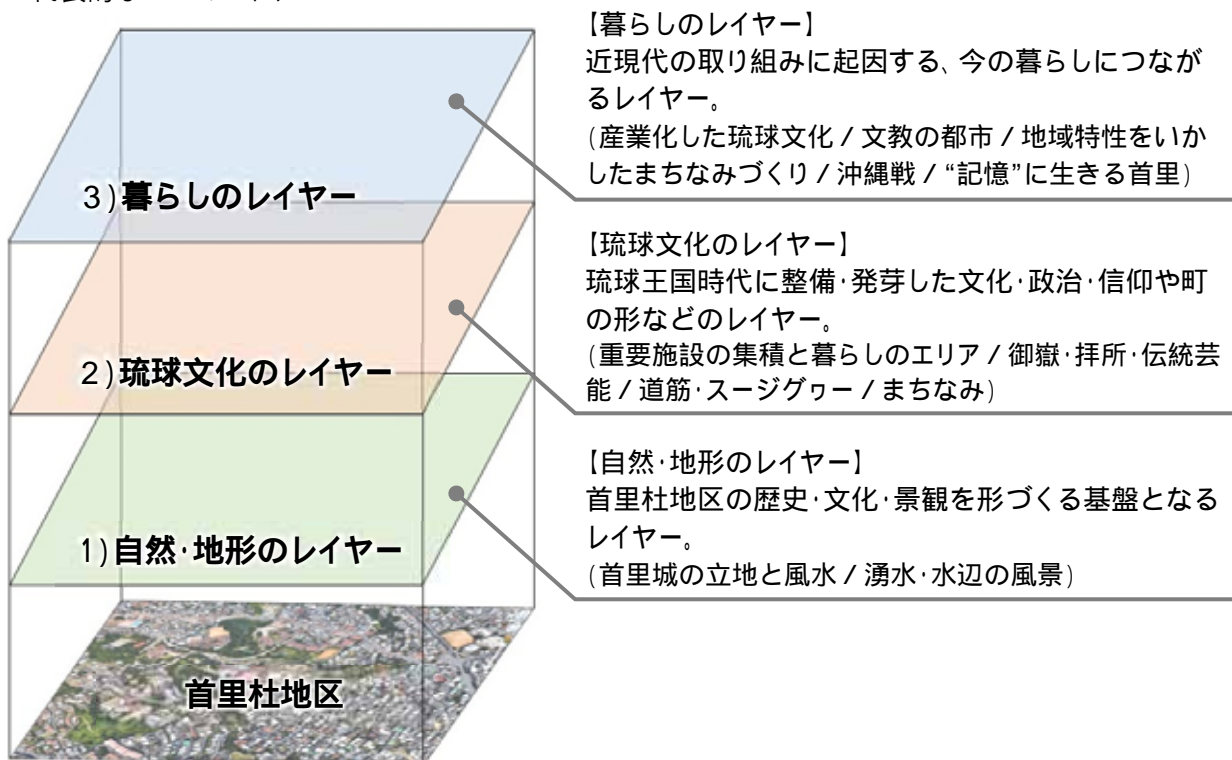
ここでは、首里杜地区のまちづくりで目指す姿を共有するために、首里杜地区の特徴について整理する。

#### (1) 首里杜地区の特徴

首里杜地区は自然・地形の成り立ちから、首里城が成立し文化が開花した琉球王国時代、近代化や戦争の記憶と戦後の復興、そして現在の暮らしに至るまで、様々な歴史や文化が重層的に折り重なった地域である。

これらの特徴を厳密に分類することはできないが、代表的なものとして、次の3つのレイヤーとして整理する。

代表的な3つのレイヤー



## 1) 自然・地形のレイヤー

### 首里城の立地と風水

#### 防衛的視点

- 首里杜地区は、弁之御嶽を頂点とする首里構造台地にある。
- 真嘉比川水系と金城川水系に挟まれている。
- 最も高く、平地を見下ろす場所に首里城が立地しており、南西の那覇港を望むことができる。

#### 風水的視点

- 弁之御嶽を頭（主山）に龍（首里城）、虎（虎瀬山）になぞらえた丘陵が連続的に延び、気の流れをつくり、龍骨上に配置された首里城は実に風水上のポイントにあり、龍潭に湛えられた水と緑が周囲の丘からもたらされる気を溜めているといわれる。
- 蔡温らが首里城及び玉陵の風水について見た記録が残されている。

『球陽』 尚敬元年（1713年）

正議大夫毛文哲・都通事蔡温等、禁城並びに国廟及び玉陵を相す





「恭しく玉陵を観るに、国都の高処に発祖し、最も好し。城中に竜泉あり。味美にして且つ清し。即ち玉陵の地性、亦知るべし。虎瀬より末吉に至る一連の山林。隠居として穴を譲り且つ、穴前平坦なり。及び其の外を望めば、即ち万家の地、廣大潤寛にして、万馬を容るるに足り、最も好し。但し其の竜身、乙より辛に走り、硬直して蜿蜒する無く、平坦にして高低無し。而して餌砂穴を譲る者無し。舌よりこれを観れば、即ち風吹き、梅雨打ちて、気を納ること能わざるが如し。予想ふに、穴後並びに左右、深く樹木を栽し、緊固密衛し、穴をして気を泄らざらしむること最要なり。蓋し玉陵の奇形は、俗眼の及ぶ所に非ず。今暫く其の略を記して、以て君子を俟つ」

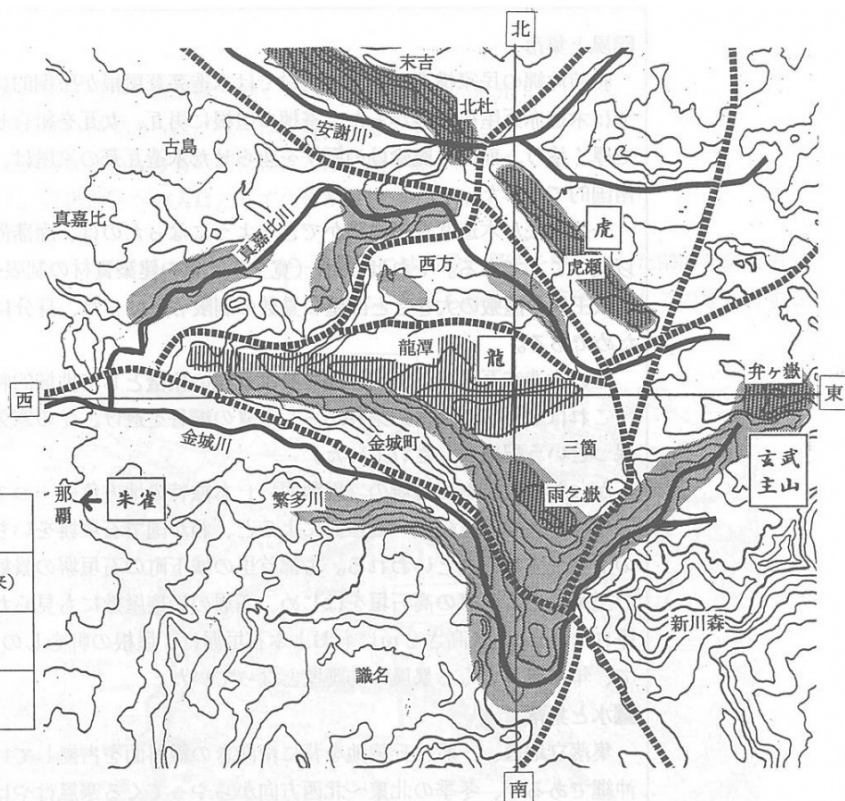
- 丘陵の緑（斜面緑地）に守られ、豊かな湧水に恵まれた首里城下の配置には、永遠の繁栄を願う心がこめられていた。

#### ■首里の風水

\* 首里の城下町は風水的に完結した形態をとっている。

石灰岩堤による丘が玄武、虎、龍という気の流れにあたり、首里城を囲む水と緑がそれらのもたらす気を溜めている。

	斜面緑地
	石灰岩堤（風水由来）
	河川
	道路



出典：「首里シンボルロード沿線地区の都市景観形成調査」（那覇市都市計画部、1996年3月）



## 湧水・水辺の風景

### 地質・湧水

- ・ 島尻層群泥岩を基盤として、それを覆うように琉球石灰岩が分布している。
- ・ そのため、首里城及びその周辺は湧水が多く、水量も多かった。ただし、近年は水量の減少がみられる。
- ・ 水が豊富なことは、首里城の立地や、泡盛や紅型、紙漉きなど、首里杜地区の産業の発展に欠かせない要素であった。



### 首里杜地区の井泉

- ・ 首里杜地区の井泉は、水質・水量ともに優れたものが多く、飲み水や生活用水として利用されていたほか、産水や新年の若水を汲むなど、人々の生活や風習と密接に関わっていた。また、井泉の多くは拝所として祈りの場ともなっている。
- ・ 井泉には人が集い、交流の場となっていた。現在でも、龍潭広場(※1)やヤマトガー(※2)など、地域の交流の場・機会として、湧水を活用した整備や人材育成がなされている。
- ・ 那覇市が『景観形成行動計画』策定時に実施した「指定有形文化財以外の歴史的遺産<sup>しゅうがい</sup>悉皆調査」(2013(平成25)年度)(※3)によれば、首里杜地区及び周辺には指定史跡(10件)以外にも50件近くの井泉が所在しており、石積みが良好に残された井泉も十数件存在する。
- ・ 市指定史跡となっているカー以外にも、歴史文化資源及び景観資源として優れているものも存在する(ただし、私有地にあるなど、活用等を検討するときには注意が必要である)。

### 1:【龍潭広場】

那覇市の交流オアシス整備事業で整備された交流スペース。  
龍潭通りに面しており、近隣小学校の児童や観光客などが安全に休息できる開放的な空間となっている。



### 2:【ヤマトガー】

沖縄県の「風景づくりに係る人材育成事業」(龍潭通り沿線地区)として、モノレール儀保駅から龍潭通りへ抜けるほとりにあるヤマトガーを地域住民で修復し、水と潤いのある風景を再生。井戸の周辺にはプランターを置き、近隣住民や子ども達が井戸から水を汲んで水やりできるようにした。



井戸の修復について職人からレクチャーを受ける様子  
出典:「風景づくりの人づくり」(沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課、2017年3月)

### 3:【『景観形成行動計画』策定時の「指定有形文化財以外の歴史的遺産悉皆調査」】

『那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査報告書』(那覇市教育委員会、1986年3月)をベースに、「那覇市環境マップ」などを踏まえて、実施された悉皆調査。

## 2) 琉球文化のレイヤー

### 重要施設の集積と暮らしのエリア

#### 琉球王国の公的施設

- 王都であった首里杜地区には、首里城を中心に、国の公的施設が集積していた。
- 冊封使歓迎の宴が行われた龍潭、王家の陵墓である玉陵、尚家の菩提寺である円覚寺などの寺院ほか、貝摺奉行所、高所、御客屋などが所在していた。
- 円覚寺跡は三門の復元に向けた取り組みが行われているほか、民有地に所在する御茶屋御殿跡のあり方についても国・県・市の連携した検討が行われている。



出典：(左)那覇市観光資源データベース／(右)那覇市公式ホームページ

#### 屋敷町から暮らしのエリアへ

- 首里杜地区は、首里城を中心に土族の屋敷が立地する屋敷町でもあった。現在も、地域の多くを住宅用地が占める暮らしのエリアとなっている。
- 王族（王子・按司）の屋敷である「御殿」、総地頭や神女などの屋敷である「殿内」も集積していた。
- 「指定有形文化財以外の歴史的遺産悉皆調査」（2013年度）によれば、国指定名勝となっている伊江殿内庭園などのほかにも、未指定の御殿・殿内・名家も90件近くある。ただし、石垣の大部分が残存し屋敷地としての雰囲気を残すものは数件程度である。
- 中城御殿跡の復元整備に関しては、県営首里城公園事業として検討が進められている。



出典：左右とも沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵（鎌倉芳太郎撮影）

## 御嶽・拝所・伝統芸能

### 御嶽等

- 園比屋武御嶽や弁之御嶽、安谷川嶽、内金城嶽、雨乞嶽など5件が国及び市指定史跡となっている。
- 「指定有形文化財以外の歴史的遺産悉皆調査」(2013年度)によれば、未指定の御嶽・拝所は、14件の所在が確認されている。多くは周辺環境と一体となって良好に保存されている。
- 悉皆調査対象となった御嶽等以外にも、地域には多くの拝所が存在していると考えられる。



園比屋武御嶽



弁之御嶽



安谷川嶽

出典:いずれも那覇市観光資源データベース

### 伝統芸能の舞台

- 首里杜地域には、祭り・伝統行事や、行事に伴う伝統芸能も継承されている。
- 汀良町の獅子舞は、500年もの歴史がある県内最古の獅子舞とされる。末吉町の獅子舞は、平良の獅子と末吉の龕を交換したのが始まりとされ約250年の歴史がある。どちらも、市指定無形文化財である。
- 赤田のみるくウンケーは、平和と豊年を招き寄せる弥勒を御迎えし、人々の無病息災と家庭円満を祈願する行事である。「路次楽の一段」と「赤田首里殿内」を奏でながらみるく行列を行う。
- 首里の各町で伝承される旗頭は、元々は綱引きの際に行われるものである。沖縄戦により一度途絶えたが、戦後に復興し、現在では地域活性化のシンボルとして各地区の青年会等が中心となって継承されている。
- これらの伝統芸能は、地域の公民館前などの広場のほか、道ジュネー(行列)として道路空間でも演じられる。



イベントでの旗頭



イベントでの旗頭

## 道筋・スージグワー

### 宿道

- 王都であった首里は、主要道路であった国頭方・中頭方西海道、国頭方・中頭方東海道、真珠道（一部が金城町の石畳道）などの宿道の起点となっている。



### 綾門大道・中山門

- 那覇港と首里をつなぐ道のうち、守礼門と中山門の間の幅広い道を綾門大道（現在の県道 50号）と呼ぶ。王家別寮の大美御殿をはじめ、玉陵、御客屋、天界寺や安国寺など王府関連の建造物が建ち並び、王都にふさわしい景観を形づくっていたとされる。
- 綾門大道では、国の繁栄と五穀豊穡を祈る「綾門大綱」（大綱引き）や、毎年元旦に馬勝負（馬術競技）が行われていた。綾門大綱は 1898（明治 31）年を最後に途絶えていたが、2007（平成 19）年に首里城公園開園 15 周年記念として 109 年ぶりに復活した。
- 中山門は、1428 年（尚巴志王の代）に創建された門で、綾門大道の開始地点を示していた。現在の首里高校裏門近くにあり、第一の国門として長らく姿をとどめていたが、老朽化により 1908（明治 41）年に撤去された。中山門建造から 100 年後（1528 年）に建造された守礼門は、中山門の同型同大として建造された。

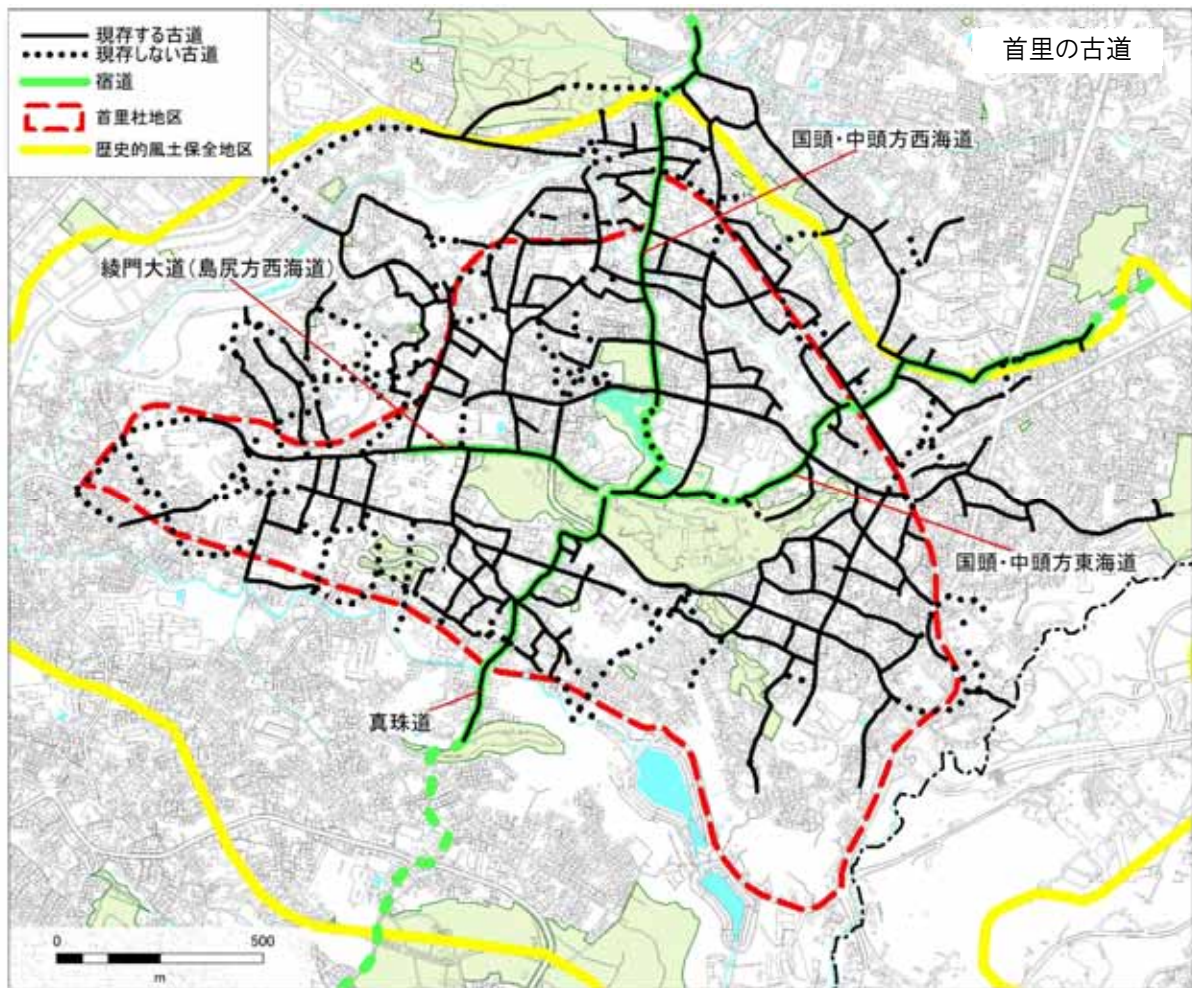


写真：那覇市歴史博物館提供

### スージグワーと石垣・石畳

- 首里のまちは、王都であった時代の構造がよく残っている。「首里古地図」に描かれている道筋・屋敷割はほぼ現状に近く、往時の形態を現在まで伝えていることがうかがえる（次頁の図参照）。
- 大中町や金城町では、小路いわゆるスージグワーが多く、また斜面地が多いため石畳も多かった。
- なかでも金城町は沖縄戦による大きな被害を免れたこともあって、往時の趣を最もよく残しているエリアである。





出典：『琉球の都市と村落』（高橋誠一、2003年）を参考に、首里古地図から作成

まちなみ(キーワード:道路、石垣、石造技術、木立・並木道、瓦屋根)

19世紀の来訪者の記録

- 19世紀に沖縄を訪れた来訪者は、当時の那覇や首里の景観について記録を残している。これらの記録は首里や那覇の士族・平民以外の瓦葺きは許されていなかった時代のものであり、瓦屋根の都市の風景が印象深かったものと思われる。

首里城の建造物及び国中にみられるいろいろの橋、陸橋、道路などは、かなりの建築技術を示している。城郭のアーチ型門や、その巨大な石造工事や石垣は、芸術的設計のみならず、熟練した技量の跡がある。【ペリー提督／1853年／「日本遠征記」】

琉球の道路は非常によい、(中略)町の中には世界中のどんな市にもまさる平滑で美しい外観を持っているのがある。【ペリーに同行した科学者のジェームズ・モロー】

堂々たる石塀をめぐる長い街に、うっそうと見事な樹木が茂っている。並木道を歩く風情だ。【プチャーチン提督に同行したロシアの文豪ゴンチャロフ／1884年】

...東を振り向くと、首都、禁城の独特の様式で建てられた家々がそれを取り囲んで隠している。亭々とした木立の間を透かして、そこそこに見える。家々は、互いにゆったりと間合いをとって、しだいに丘の頂に向かって積み上げられていき、そのてっぺんに王宮を戴いている。【ジョン・マクラウド】

出典:『那覇市景観計画』(那覇市、2011年5月)

自然と歴史と人文が調和した庭園の都市

- 1940(昭和15)年に沖縄を訪れた、日本民藝運動の創始者である柳宗悦は、首里について次のように述べている。

日本にある殆ど凡ての城下町を訪ね歩いた吾々に、どの町が最も美しいかを問はれる方があるなら、私達は躊躇はず直ぐ答へるでせう。沖縄の首里が第一であると。(中略)

一度道を横に折れて町々を縫へば、小石に敷きつめられた昔乍らの道が吾々の足を終りなく誘ふのです。右にも左にも苔むした石垣が連なり、それに被ひかぶさる「がじまる」や、濃い福木の緑が続き、その間に見事な赤瓦の屋根が、あの怪物を戴いて現れてくるのです。**それは真に活きた庭園の都市なのです。**之以上に人文の華を織りなした名園があるでせうか。一度その懐に入るならば、佇徊時を久しくして去りがたい想ひを禁ずることができないでせう。**自然と歴史と人文との調和が、かくもよく保存せられている都市**は稀有な存在だと云はねばなりません。【柳宗悦】

※下線及び強調は引用者による

出典:『沖縄の人文:柳宗悦選集5』(日本民芸協会編集、1972年5月)

- 那覇市では柳宗悦の文章を基に「亜熱帯庭園都市」を景観まちづくりの理念に掲げている。

首里を望む・首里から望む

- 首里を望む視点として、「首里八景」などの風景評価が伝わる。「八景」とは、ある地域の優れた風景を8つ選ぶ風景評価の様式で、中国宋の「瀟湘八景」をなぞらえて各地でつくられた。首里では、「首里八景」、程順則による「中山東苑八景」、宜湾朝保による「崎山別宮八景」などがある。また楊文鳳は「中山首里十二勝景」を詠んでいる。「首里八景」がいつ頃、現在に伝わる形となったのかは明らかではないが、高橋康夫は「中山八景」や「首里十二勝景」の成立時期の分析などから、おそらく18世紀の末頃だろうとしている。新崎盛珍の『思出の沖縄』(1956年)には、首里八景の表題を提示し、各景に関連する詩歌・漢詩を紹介している。

また『詩歌集 那覇を詠う』には、同名での和歌が紹介されている。(2章-11～12頁参照)

- また、先述の19世紀の来訪者の記録などでも那覇港から首里を望む視点が記録されている。
- 首里から望む視点として、首里杜地区内の那覇市景観計画における歴史文化眺望点及び視対象は次表のとおりである。

#### 首里杜地区の眺望点

No.	眺望点	対象
1	末吉宮	首里城及び首里杜一帯に対する眺望点
2	ニシムイ御嶽	首里城及び首里杜一帯に対する眺望点
3	虎瀬公園	首里城及び首里杜一帯に対する眺望点
4	首里城広福門	首里杜一帯及び緑の稜線に対する眺望点
5	東のアザナ	弁之御嶽、首里杜一帯及び緑の稜線に対する眺望点
6	西のアザナ	西の海を背景とした市街地に対する眺望点
7	京の内	崎山御嶽、雨乞御嶽一帯及び緑の稜線に対する眺望点
8	崎山御嶽	首里城及び首里三箇の街並みに対する眺望点
9	繁多川公園	首里金城町一帯の街並みに対する眺望点

出典:「那覇市景観計画」(那覇市、2011年5月)



出典:『那覇市景観計画』(那覇市、2011年5月)から作成



(参考) 首里八景について

- |                           |                             |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1. 冕嶽積翠(べんのたけせきすい) : 弁之御嶽 | 2. 零壇春晴(うだんしゅんせい) : 雨乞御嶽    |
| 3. 経台新荷(きょうだいしんか) : 弁財天堂  | 4. 龍潭夜月(りゅうたんやげつ) : 龍潭      |
| 5. 虎山松濤(こざんしょうとう) : 虎瀬山   | 6. 崎山竹籬(さきやまちくり) : 崎山馬場     |
| 7. 西森小松(にしもりしょうしょう) : 西森  | 8. 万歳嶺夕照(ばんざいれいせきしょう) : 観音堂 |



※特に注釈が無い場合は、以下出典による。

漢詩：新崎盛珍『思出の沖縄』(新崎先生著書出版記念会、1956年)

詩歌：那覇市歴史資料室編『詩歌集 那覇を詠う』(那覇市(「八重山博物館所蔵資料」)、1997年)

1 冕嶽積翠(べんのたけせきすい)

弁之御嶽は首里の最高所の首里城の東側に位置し、冊封使の行楽地のひとつでもあり、「遊弁嶽」などの漢詩も残されている。「弁嶽積翠」は弁之御嶽の小高い丘が、遠く眺めると松樹の緑が重なっている様子を讃えている。

冕嶽積翠 喜舎場朝賢(東江)

孤峰高聳禁城東 滿眼嵐光四季同  
原是鍾靈多秀色 接天佳氣日葱々  
又

雄姿不興衆峰同 積翠千重接碧空  
挂屐朝来凌絶頂 焉知身在画图中

冕嶽積翠

更にまた 高くもあふぐ 冕嶽 木ごとに春の みどりかさねて

2 零壇春晴(うだんしゅんせい)

「零壇」とは雨乞御嶽のことで、崎山町の南端の断崖上の高台に位置するが、視野が最も広く眺望も開けた勝地である。「零壇春晴」とは春雨の合間に雨乞御嶽の丘に登った時に、見下ろす風景の美しさを讃えている。

雪壇春望 新崎盛信(清堂)  
青山列屏海横航 緑圃鋪氎田綴袂  
此地風光吟不盡 描婦朝夕壁間望

雪壇春晴  
雨に晴れて なほ目に近く 雪の 園に見下ろす  
春の海原

3 経台新荷(きょうだいしんか)  
「経台」とは、弁財天堂のことである。堂のたつ円鑑池は蓮の美しさが賞賛されていた場所であり、「新荷」とは蓮の若葉のことをいう。蓮の眺めもさることながら、澄み渡る池の眺めや水面に映し出される天女橋や堂の風景を賞賛している。

経台荷花 恩河朝恒  
鳳凰城下梵宮傍 貼水新荷未放香  
待到花開紅千里 応邀睿賞納風涼

経台新花  
濁りなき 心の水や かよふらむ 法の台(うてな)  
の露の蓮葉(はちすば)

4 龍潭夜月(りゅうたんやげつ)  
ハント山を背景にし、首里城の影をうつす龍潭を市中第一の景勝の地として讃えている。

龍潭夜月 汪楫(舟次)  
海心秋月最分明 夾道還教列火城  
涼夜肯容輕露下 寒潭遮莫老龍驚

龍潭夜月  
龍もさぞ 淵をはなれて いでやせん 波てる月の  
すめる今宵は

5 虎山松濤(こざんしょうとう)  
「虎山」とは虎瀬山(虎頭山)のことである。城北の雄鎮にふさわしく松林が茂る場所だったとされる。「虎山松濤」とは紺碧の海波の音と聞き間違うくらい、虎瀬の丘の松林の梢がざわめいている様子を表現している。

虎山松濤 楊文鳳  
石虎山頭夕照斜 松風颯颯拂殘霞  
幾回葉底琤●處 錯認濤聲入夜譁  
※●=「王+宗」

虎山松濤  
磯ならで 波立ちくると おぼろげば 虎やま松に  
あらし吹く也

6 崎山竹籬(さきやまちくり)  
王家の御用馬場であった崎山馬場は、きれいな竹籬が道の両側に並び、その竹の葉におく露が美しいことを讃えている。

崎山竹籬 尚育王  
剪成緑竹護家旋 濃蔭如屏正及肩  
俗美何須堆石固 清風亦有滿村前

崎山竹籬  
つくりなす 籬の竹の すずしさに ゆきていとはぬ  
崎山の里

7 西森小松(にしもりしょうしょう)  
西森の丘は、「小松」と称されて虎瀬山と同様に松林となっていたようである。西方は那覇を眼下に見下ろし、遠い慶良間や久米島の島々が手にとるようにみえ、眺望が首里随一の場所であることを讃えている。

上江洲由具  
浮世名に立ちゆる西森の小松  
千代の色ふかく並だるきよらさ ※  
※『思出の沖繩』より

蔡如霖  
小松鬱々四時春 已覺蕭疎絶俗塵  
勿謂而今材短小 他年定作棟梁身

西森小松  
千代ふべき 影こそあかね ふかみどり そむる小  
松の しげる西森

8 万歳嶺夕照(ばんざいれいせきしょう)  
万歳嶺とは観音堂のある丘である。首里の最西端に位置し、那覇付近の風景を見ることができる。夕暮れに観音堂の森を訪れると、真っ赤な日輪は四方に後光を発し、赤や黄に焼けて去来する雲は美しい。時々刻々変幻する眺めを讃えている。

豊平良金(容齊)  
穿松登処以登天 四面雲山眼底連  
万歳伝名口鎮国 神風吹過翠微巔  
万歳嶺夕思  
夕日さす 嶺の暑さは しのばれん 万歳といふ  
その名したひて

### 3) 暮らしのレイヤー

#### 産業化した琉球文化(泡盛・伝統工芸等)

##### 泡盛

- 湧水の豊富な首里杜地区では、泡盛の製造が行われた。琉球王府は、泡盛の品質保持のため、首里三箇（鳥堀町、赤田町、崎山町）でのみ泡盛の製造を許可し、厳しい管理下に置いていた。
- 廃藩置県後、酒造りの免許制が始まり民間でも泡盛が製造されるようになり、各地に酒造所が広がった。沖縄戦で泡盛業界も大きなダメージを受けたが、戦後に復活。首里杜地区では2つの酒造所が現在も営業を続けている。



出典：沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵(鎌倉芳太郎撮影)

##### 伝統工芸

- 琉球王国時代に貿易立国を国是として栄えた沖縄は、諸外国の影響を受けて種々の工芸を生み出した。これらの工芸は、王城の城下であり、また那覇港があった首里・那覇を中心にして発展し、今日まで受け継がれている。紅型や首里の織物は、国指定重要無形文化財となっている。これらの工芸や、紙漉きなどのその他生業が発展した背景には、湧水が豊富な地域であったことが影響していた。
- 紅型や織物など伝統工芸を発展させ、現代の暮らしにあった商品が生み出されているほか、染織体験など観光とも結びついている。
- 琉球びんがた事業協同組合と那覇伝統織物事業協同組合が、国と那覇市の支援を受けて整備中の「首里染織館 suikara」は、2022（令和4）年5月にオープンし、着尺や帯の販売、製作体験、着付けサービス、沖縄の染織の紹介展示、観光情報発信などの機能を備える予定である。



出典：那覇伝統織物事業協同組合ホームページ

## 文教の都市

### 首里城跡地及び周辺地域への学校等の立地

- 国学・平等学校所：1798年に、琉球王府時代の最高学府である公学校所（国学）が設立された。現在の首里高等学校の場所に設置され、後の1801年に龍潭湖畔（現在の県立芸術大学の場所）に移転するとともに国学と名称を改めた（「琉球処分」により閉鎖）。また、国学の設置とともに、首里三平等（南風之平等、真和志之平等、西之平等）に平等学校所が設置された。村学校での学びを終えたものが平等学校所入学し、優秀なものはさらに国学に進んだ。
- 那覇市立城南小学校：1880（明治13）年、首里に北小学校、東小学校、西小学校の3校が創立、1886（明治19）年に統合して首里小学校となった。同校は、1923（大正12）年に首里第一尋常高等小学校、1941（昭和16）年には首里第一国民学校となった。首里小学校の校舎は中山門前に置かれたが、校舎不足により、首里城の下之御庭に校舎が建造された。1912（明治45）年から沖縄戦消失まで城内に校舎があった。
- 那覇市立城西小学校：1886（明治19）年、首里小学校女子教場が創立された。その後、首里尋常小学校女子部、首里女子尋常高等小学校に改称。1923（大正12）年に首里第二尋常高等小学校、1941（昭和16）年には首里第二国民学校となった。1946（昭和21）年に城西初等学校に校名が変更。1972（昭和47）年の本土復帰に伴い、那覇市立城西小学校となった。
- 沖縄県立首里高等学校：県内でも古い歴史を持つ学校で、首里中学校までさかのぼる。その後、沖縄県立第一中学校を経て、1911（明治44）年に沖縄県立首里高等学校となった。
- 沖縄師範学校：1880（明治13）年に沖縄小学師範学校が設立。1881（明治14）年に名称を沖縄師範学校、沖縄県立師範学校と改称。1886（明治19）年に首里当蔵の龍潭池畔に校舎を移転した。沖縄戦では教職員や生徒らが戦場に動員された。終戦後、後身校を設置せずに廃止。
- その他、首里城内には、首里市立女子工芸学校や、沖縄県立工業徒弟学校の校舎が置かれていた。また、首里城内の北殿は、首里公会堂や郷土博物館としても使用されていた。

### 沖縄戦後の学術機関の集積

- 1950（昭和25）年5月、首里城跡に琉球大学が設立される。琉球大学はその後、1984（昭和59）年に現在のキャンパスへと移転した。
- 1965（昭和40）年から翌年にかけては、中城御殿跡地に琉球政府立博物館（1972年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称）が建設される。博物館は2007（平成19）年におもろまちへ移転した。
- 1986（昭和61）年4月には、沖縄県立芸術大学（美術工芸学部）が開設し、沖縄の伝統工芸や伝統芸能をはじめとした、芸術文化の担い手を育成している。

地域特性をいかしたまちなみづくり

都市景観形成地域への指定

- 那覇市では、景観条例に基づき、特に地域の特性をいかした景観形成が必要な地域として、伝統的な建築物などが一体をなしてその区域の特色をあらわし、都市景観を形づくっている地域や、これから都市景観の形成のために計画的に整備していく必要がある地域などについて、都市景観形成地域として指定し、都市景観形成基準などを定めている。
- 首里杜地区では下記の2地区が都市景観形成地域に指定されており、赤瓦や琉球石灰岩などを活用した特徴的な景観の形成が進められてきた。これらの地区では、赤瓦葺きの屋根工事（大規模修繕含む）と琉球石灰岩の石積み・石張り、木材による修景工事費について助成を実施している。

<p>首里杜地区内の都市景観形成地域</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 首里金城地区都市景観形成地域</li> <li>➢ 龍潭通り沿線地区都市景観形成地域</li> </ul>	<p>追加指定を検討中の地域</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ ニシカタ地区</li> <li>➢ 首里三箇地区</li> </ul>
---	---



出典：「首里金城地区都市景観形成地域パンフレット」(那覇市)

### 歴史的風致をいかした街路等の整備

- 那覇市では、首里城の復元の気運が高まった 1982（昭和 57）年頃から、周辺地域の歴史的風致をいかしたまちづくりに取り組んできた。
- また、那覇市では各種街路事業や「歴史散歩道整備事業」、「交流オアシス整備事業」などによる空間づくりにも取り組んでいる。



### 沖縄戦

#### 10・10 空襲

- 1944（昭和 19）年 10 月 10 日、アメリカ軍は南西諸島全域に空襲を行った。この空襲による那覇市の被害は、死者 225 人、負傷者 358 人で、焼夷弾攻撃により全市域の 90%近くが焼失した。

#### 第 32 軍司令部壕

- 1944(昭和 19)年 3 月、南西諸島の防衛を目的に第 32 軍が創設された。同年 12 月、司令部壕の構築が始められ、沖縄師範学校など多くの学徒や地域住民が動員された。1945(昭和 20)年 3 月、空襲が激しくなると、第 32 軍司令部は地下へ移動し、米軍との決戦に備えた。
- 司令部壕内には、牛島満軍司令官、長勇参謀長をはじめ総勢 1,000 人余の将兵や県出身の軍属・学徒、女性軍属などが雑居していた。戦闘指揮に必要な施設・設備が完備され、通路の両側には兵隊の二、三段ベッドが並べられていた。壕生活は立ちこめる熱気と、湿気や異様な臭いとの戦いでもあった。
- 壕内は 5 つの坑道で結ばれていた。現在、立ち入りが制限されているが、活用に向けた検討が進められている。

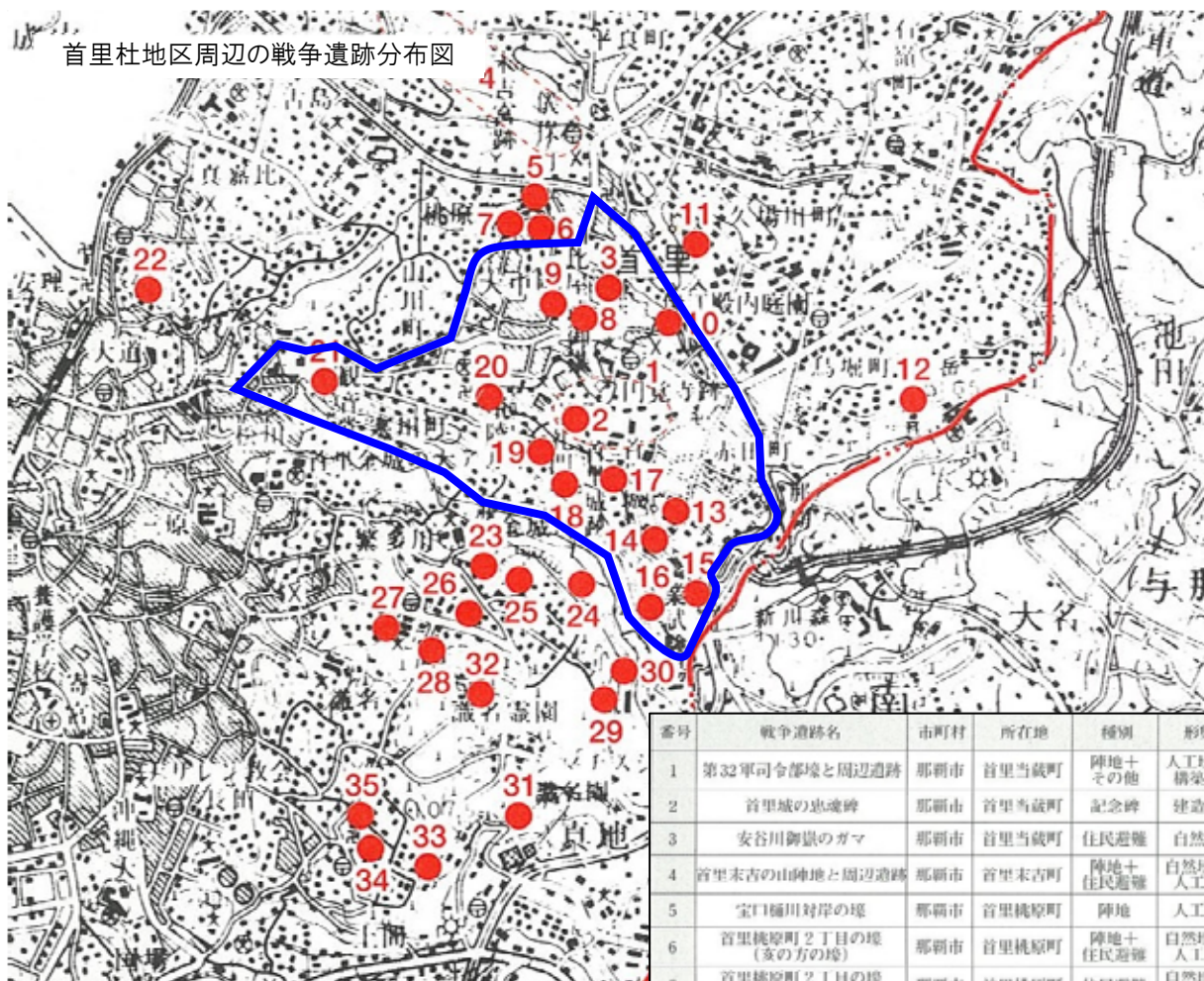


出典：沖縄県公式 YouTube チャンネルより

### 首里の戦争遺跡

- 首里城東のアザナ城壁の北側には自然洞穴があり、沖縄県師範学校の防空壕となっていた。師範学校の生徒自らが設計、掘削し、「留魂壕」と名付けられた。師範学校の生徒たちはこの留魂壕から鉄血勤皇隊に徴用され、各部隊へ配属された。
- その他、斜面地の多い首里には、大小様々な壕が掘られていた。
- 平和学習の場として一中健児の塔、養秀会館の一中資料室、留魂壕、首里教会、京の内のガマなどに人が訪れているほか、中城御殿の石牆には弾痕が残るなど、戦争の傷跡を今に伝えている。

首里杜地区周辺の戦争遺跡分布図



出典：「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅳ)一本島周辺離島及び那覇市編— 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 25 集」(沖縄県立埋蔵文化財センター、2004 年 3 月)

※首里杜地区の青枠は引用者による。

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	第32軍司令部と周辺遺跡	那覇市	首里当歳町	陣地+その他	人工壕+構築物
2	首里城の忠魂碑	那覇市	首里当歳町	記念碑	建造物
3	安谷川御嶽のガマ	那覇市	首里当歳町	住民避難	自然壕
4	首里末吉の山陣地と周辺遺跡	那覇市	首里末吉町	陣地+住民避難	自然壕+人工壕
5	宝刀樋川対岸の壕	那覇市	首里桃原町	陣地	人工壕
6	首里桃原町2丁目の壕(家の方の壕)	那覇市	首里桃原町	陣地+住民避難	自然壕+人工壕
7	首里桃原町2丁目の壕(戌の方の壕)	那覇市	首里桃原町	住民避難	自然壕+人工壕
8	中城御殿の弾痕のある石垣とガマ	那覇市	首里大中小町	その他	自然壕+構築物
9	池端町民の防空壕群	那覇市	首里大中小町	住民避難	人工壕
10	真嘉比川沿いの壕	那覇市	首里汀良町	住民避難	人工壕
11	虎瀬山公園の陣地跡	那覇市	首里赤平町	陣地	人工壕
12	弁ヶ嶽のトーチカ	那覇市	首里鳥塚町	陣地	構築物
13	首里崎山町1丁目弾痕の残る壁	那覇市	首里崎山町	その他	建造物
14	雨乞御嶽西星の壕群	那覇市	首里崎山町	住民避難	自然壕+人工壕
15	ハンナダー古墓地壕群	那覇市	首里崎山町	住民避難	自然壕
16	ヒジガーピラ東側の陣地跡	那覇市	首里崎山町	陣地	人工壕
17	崎山御嶽南側の壕群	那覇市	首里崎山町	不明	人工壕
18	神村聖山の壕	那覇市	首里金城町	住民避難	自然壕
19	金城町大アカギ北側の壕	那覇市	首里金城町	住民避難	人工壕
20	玉降南側の壕群	那覇市	首里金城町	不明	自然壕+人工壕
21	首里観音堂南下の陣地跡	那覇市	松川	陣地	不明

## “記憶”に生きる首里

### 戦後の首里の復興

- 沖縄戦後の首里の復興は、1945（昭和 20）年 12 月 14 日の首里建設先発隊の派遣に始まる。徐々に人が戻っていき、瓦礫を整理し、石垣を積みなおし、バラックを建て、最小限の衣食住を確保しながら首里を復興させていった。翌年には市役所も再開された（現首里中学校隣接地）。
- 1954（昭和 29）年 9 月に、那覇市との合併により那覇市に編入。編入後、首里の名を残そうと、元の首里地域の町は、首里を冠した住所表示となった。
- 首里の人々を中心に、守礼門など文化遺産の復興の動きが高まり、1957（昭和 32）年に園比屋武御嶽石門、1958（昭和 33）年に守礼門、1968（昭和 43）年に弁財天堂・円鑑池などの復元が進んだ。
- 1972（昭和 47）年に本土復帰し、沖縄県となった。



写真：沖縄県公文書館

### 琉球王朝祭り首里(首里文化祭)

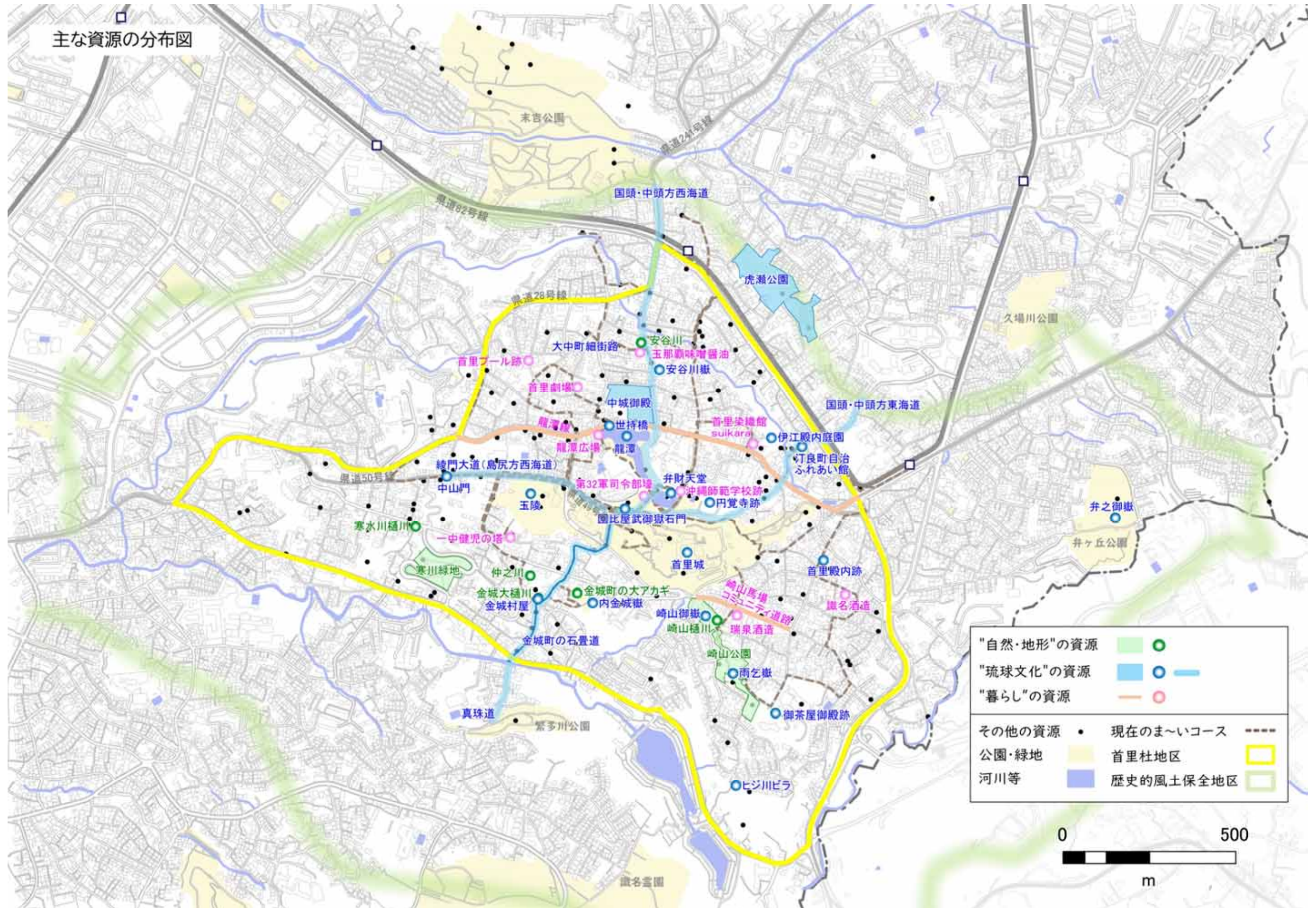
- 琉球王朝祭り首里は、11 月 3 日（文化の日）に開催され、「国王御三ヶ寺参詣行列」を再現した古式行列や、旗頭・祝賀パレードが行われる。
- 1960 年に始まった「首里教育祭り」が発展し、「首里文化祭」を経て現在の名称になった。地域によるイベントで、50 年以上の歴史を持つ。龍潭通りで行われる古式行列や旗頭のパレードは、地域の子どもたちをはじめ参加者にとって古都首里の魅力を感じられる機会となっている。



### 新たな“記憶”

- 1950（昭和 25）年には、首里劇場が誕生。現存する最古の劇場となっている。
- この頃には、地域住民が主体となって、県内初の淡水プールとされる首里プールの建設も行われている。首里プールは、有志による建設委員会が設立され、寄付金と手弁当による児童生徒の勤労奉仕等、行政の枠を越えた「手作りプール」として 1952（昭和 27）年誕生。その後首里市へ移管され、市営プールとして運営された。1994（平成 6）年閉鎖。
- 首里杜地区についての“記憶”は、現在も日々積み重ねられている。特に子どもの頃に遊んだ場所や体験したこと、日常生活におけるお気に入りの場所などは、地域への愛着を生み、シビックプライドの醸成につながっている。







## (2) 首里杜地区のまちづくりで目指す姿

持続可能な歴史まちづくりの推進にあたっては、「自然・地形」「琉球文化」「暮らし」の3つのレイヤーに代表される地区の特徴を踏まえ、将来へと受け継いでいく首里杜地区の目指すべき姿の共有が不可欠である。

3つのレイヤーに象徴されるように、首里杜地区は、自然や歴史を基盤にした首里の人々の営みによって形づくられてきた。沖縄戦などの被害を受けながらも、歴史・文化を受け継ぎ、新たなまちを形成してきた活力は、首里に住む人々や関係する人々の、古都首里への誇りと愛着、そして訪れる人々の理解と親しみによって生み出されていると考えられる。このような自然・歴史・暮らしが調和する首里らしいまちに100年後まで住み続けられる持続的なまちづくりを目指す。

なお、ここで示した考え方は、これまでも那覇市都市計画マスタープランなどにおいて示されてきた方向性と同じものである。沖縄県の「新・沖縄21世紀ビジョン基本計画(案)」や「観光振興基本計画」等においても、「歴史文化を感じる景観まちづくり」や「世代を超えて自然・歴史・文化と人を紡いでいく島」というキーワードで、同様の方向性が示されている。

これらを踏まえて、改めて首里杜地区のまちづくりで目指す姿を文章化すると、次のとおりである。

首里城を中心とした古都のたたずまい、そこに息づく自然・歴史・文化や賑わいが、  
住民や来訪者にいつまでも受け継がれていく首里杜地区

**(参考)「那覇市都市計画マスタープラン」における首里地域の「地域の将来像」**

首里城を中心とした地域に残る文化財や御嶽、樋川などの数多くの歴史・文化遺産、地形や水系などの自然環境の保全・活用を図ります。また、首里城の城下町として歴史的な環境に配慮した景観形成を進めるとともに、琉球泡盛や紅型などの琉球王国時代から受け継がれてきた伝統産業などを、まちづくりの視点から育成する環境整備を図ります。首里らしい趣と落ち着きのある住環境の形成を図るとともに、観光拠点のにぎわいを地域全体へ誘導することで、回遊性のある魅力的な歴史と文化の薫る首里のまちづくりを進めます。



出典:「那覇市都市計画マスタープラン」(那覇市都市みらい部 都市計画課、2020年3月)

**(参考)「新・沖縄 21 世紀ビジョン基本計画(案)」における首里杜地域に関する記述**

**基本施策 1 (5)悠久の歴史や伝統文化に育まれた魅力ある空間と風土の形成**

**ア 首里城の復興**

**首里城公園の管理体制の強化と首里杜地区の歴史まちづくりの推進**

首里城公園の特性や想定される様々な出火要因等を踏まえた新たな防火対策等の実施や公園全体の防火対策の強化を図り、国や関係機関と連携した再発防止策の策定及び安全性の高い施設管理体制の構築により、二度と火災により焼失を生じさせないよう取り組みます。また、首里城を中心とした首里杜地区において、「新・首里杜構想」による歴史まちづくりの実現に向けて、行政・有識者・住民・企業等の関係者が連携して、自然・歴史・文化を感じる景観の創出に取り組みます。さらに、県営公園内の中城御殿跡や円覚寺跡等の歴史文化遺産の計画的な整備や、歴史・文化を体験できる行催事等を推進し、首里城公園の魅力の向上を図るとともに、御茶屋御殿等の地域に点在する文化資源の段階的な整備について、事業主体や保存に係る調査等の課題解決に向けて、那覇市、国と連携して実現可能な方策や観光資源としての利活用の検討に取り組みます。加えて、観光交通の分散化を促す取組及び大型バス駐車場やパーク・アンド・ライドの推進等による観光客の受入環境の整備、龍潭線及び周辺道路の無電柱化や道路整備による交通環境の整備、公共交通網の充実や ICT を活用した情報提供による歩行者が周遊しやすい環境の形成に取り組みます。

出典:「新・沖縄 21 世紀ビジョン基本計画(案)」(沖縄県企画部企画調整課、令和4年4月)